第3回 SPARC Japan セミナー2017「オープンサイエンスを超えて」

質疑応答・ショートディスカッション

林　和弘　（科学技術・学術政策研究所）
Heather Joseph　（SPARC North America）
倉田　敬子　（慶應義塾大学文学部）
市古　みどり　（慶應義塾大学三田メディアセンター）

●林　このショートディスカッションでは、図書館の今後につながるような議論を集中的にできればと思います。何か質問や論点提示があれば積極的にお願いしたいと思います。

Heather さんにこの機会にお伺いしたかったことがあります。SPARC はもともと北米研究図書館協会（ARL）と共に始まったものですが、今は ARL から独立して活動しているという理解でよろしいでしょうか。その上で、今、SPARC と図書館の活動における関係はどうなっているのかということについて、簡単にご紹介いただけますか。

●Joseph　私たちは米国とカナダの ARL のプロジェクトとして生まれました。それが育って、成熟し、派生して独立組織になりました。私たちは今も図書館の会員組織です。ARL の会員の 90%が SPARC の会員にもなっていますが、ARL の会員ではないのに、SPARC の会員にはなっている図書館が他に 125 館以上もあります。ですから、会員は研究図書館以外にも広がっているということですね。アメリカでは、リベラルアーツカレッジや大学の他、2 年制のコミュニティカレッジや工科大学も会員になっていて、これらは最重要ジャーナルの文献にアクセスすることがほとんど不可能になっています。これらの機関では、オープン教科書の導入によって学生が高等教育に手が届くようになります。従って、私たちは依然としてライブラリーコミュニティと完全につながっていて、ライブラリーコミュニティのために働いていますが、対象とする図書館の幅が拡大しています。このことは、ジャーナルへのオープンアクセスを推進するのに必要な特定のアクションに向けてもっと素早く動いたり、話し合ったりする上でとても役に立っています。私たちは、研究や教育環境全体についてより包括的に見通して、図書館が重要な役割を果たせる場所を見極めていますが、その機関のタイプや、その機関に所属する人々のタイプによって異なる役割を果たしています。

●林　SPARC が ARL から離れたのは、ドラスチックな変化があったから、あるいはドラスチックな変化を求めたからと見る向きがあったのですが、あくまでライブラリーコミュニティとの関係性はしっかり維持した上で進められているということが伺えて、少し安心しました。ライブラリアンの方々がこの動きを気にしていたとも伺っているので、それを確認できてよかったです。

●フロア 1　バイオサイエンスデータベースセンターの者です。私は以前、企業でマネジャーをしていた関係でマネジメントツールに非常に関心がありました。それで今の職場に移ってからマネジメントツールを導入しようと思ったのですが、研究者の方にこういうものはあまり向かないのではないかという実感を持っていて、最近では外部の業者との間でしか使っていないのですが、先ほど倉田先生のお話を伺って、まだこれ

を使える余地があるのではないのかと思い直しているということが 1 点です。

もう 1 点、そのようなマネジメントツールや管理ツールを含めて、組織独自のものをつくるのは本当に最後の手段だということは、ここにいらっしゃる皆さんには大体ご賛同いただけると思うのです。そうなってくると、例えば世の中に出回っているクラウドを含めたツールで何を使っていくかはとても重要になると思います。研究者それぞれが独自のものを何か選んで使っていくと、どうしても互換性にも支障を来しますし、非効率だと思うのです。そういうところで図書館に、図書館だけがやるべきかは分かりませんが、補助をするというよりも、むしろ戦略性を持って「このツールを使っていきましょう」「これをまとめて契約します」といった司令塔のような役割を果たしていただくのがいいのではないかと思いました。

●**林**　ありがとうございます。大変心強い応援の言葉を頂いたように思いますが、これを受ける形でどなたかコメントなどありますか。

●**村山**　それについて、もう一度、Heather に聞きたいです。スカラリーコミュニケーション、データプリザベーション、ペーパープリザベーションの専門家として、ライブラリアン、パブリッシャー、リポジトリマネジャーがおられます。研究者でないその方々がスカラリーコミュニケーションの専門家として研究者を導いたり、コンサルタントをするという機能があるという話が先ほどの講演にあったのですが、コンサルタントにとどまらず、エデュケイトしたり、実際に訓練・トレーニングをしたり、そのようなファンクションをアメリカやカナダで見つけることはありますか。

●**Joseph**　同じ考えですね。ライブラリーコミュニティはデータキュレーションや研究データ管理の研修をもっと受けたいと熱望していると思います。私はジャーナル出版者としての訓練を受け、ライブラリーコミュニティに移る前に 15 年間編集者として働いていました。コミュニティのニーズが浮かび上がるにつれ、そのニーズを満たすためにスキルを新しくつくり変えていくライブラリーコミュニティの能力に、いつも私は感銘を受けています。私たちのライブラリアンや図書館の専門職員にとって、アメリカで最も急増している仕事はデータキュレーションライブラリアンや、それから派生するものです。私たちは研修を受けられるようにするためのリソースとサポートを必要としています。とりわけ、私たちは研究財団コミュニティと協議して、データ管理やデータキュレーションをサポートするのに必要なポジションに資金が出され、財団がこのようなポジションをサポートするよう、グラント要件に盛り込むよう働き掛けています。図書館にデータキュレーションライブラリアンが存在するようにしたいと思っていますし、そのために私たちと一緒に働いてくれる人なら誰とでも協力していきます。21 世紀のライブラリアンの役割は、データ管理とデータキュレーションに根差しています。

●**市古**　確かに図書館員がいろいろな場面に入っていけるチャンスはたくさんあると私も思っています。例えば、倉田先生が先ほど入力が面倒と言ったシステムについても、図書館はコミットしています。そのときに、私たちが持っている基礎知識や技術は、ID の知識、メタデータの知識など、さまざま存在します。まず学内で図書館員への信頼をつくってから、そのような基礎知識や技術を図書館員は使えるのだよというところをうまく見せていけば、チャンスはまだたくさんあると私は個人的には感じています。

●**林**　これに関連しても構いませんし、他の論点、いかがでしょうか。ICSU-WDS の方、お願いします。

●**フロア 2**　私もやっているのですが、ドメインの研究者がそれぞれのデータセンターを持っているという大学は、京都大学や東京大学など、たくさんあると思

うのです。大学のドメインのデータセンターと、図書館におけるデータのアクティビティはどういう関係になるのでしょうか。

●林　それはデータサイエンティスト、データライブラリアン、データキュレーターとは何ぞや、そのスキルセットは何かというディスカッションになります。それを明快にご説明いただける方は倉田先生でしょうか。

●倉田　スキルセットというよりは、大学内でどのようにデータを管理したいかということになると思います。例えば、理工学部などでは、図書館とは全く別にデータセンターをつくった方がいいと考える大学ももちろんあると思います。では、図書館がそこに本当に加われるのかは、そのデータセンターを大学の中でどのように位置付けるかという問題だと思います。

それを言うのでしたら、高エネルギー物理学分野など、分野のデータセンター自体が大規模に構築されている分野や領域は幾つかあるわけで、そういう方向に進むこともできるわけです。村山先生のところもそうです。つまり、特定の分野ドリブンでデータセンターをつくることもできるし、大学内でつくることもできるし、図書館がそれを主導することも不可能ではないというところで、いろいろなレベルでいろいろな運動が起きてしまうのだと思います。

それをどう統合するのか、調整するのかというのが、今、見えていないというところが問題だと思うのです。そのためには全体のランドスケープ、全体をどうしていきたいかという目標をもう少しみんなで共有できた方がいいのではないかと私は思っています。

●フロア 2　ありがとうございます。去年、京都で World Data System（WDS）関係のシンポジウムをしたときに、イリノイ大学の図書館の方を招待したのです。そのときにおっしゃったことは、大学の中にあるデータセンターは確かに専門性があって、利用者のニーズに応えたきめ細かいソリューションを提供できるけれど、一番の問題点はファイナンシャルだということです。研究者は研究第一なので、そういうデータサービスにはなかなかお金が来ない、これからもどんどんそうなることが予想される、そういうときに大学全体として、図書館とドメインのデータセンターが一緒になってファンディングなどのサポート体制というか、永続性のあるデータサービスをエスタブリッシュするシステムを考えるべきではないかと思うのです。

●倉田　そのとおりだと思います。今、それが完全には見えていないのですが、個々の図書館も国立図書館も含めて、今後ものすごい量のデータになっていくのは明らかで、一体それをどういう形でみんなで作り上げていけるのか、答えは一つでなくてもいいと思うのです。段階的にでもいいと思います。でも、あまりめちゃくちゃな方向に行かないように、できるだけ段階的にでも目標に向かっていくためには、もう少し最終的な目標像が共有できた方がいいのではないかと考えています。

●林　それがまさに Paul さんの言っているオープンサイエンスのシステムというものですね。それが共有できてからでなければビジネスも回らないという話です。Heather、どうぞ。

●Joseph　図書館とデータセンターが協力するのは大事なことです。日本の大学にコロラリーがあるか分かりませんが、アメリカでは、委託研究のオフィスと研究オフィスがあります。図書館と委託研究のオフィスは、特にデータとデータ管理の考えを巡って、異なる種類の協働関係を築く必要があります。現時点では、非常に弱い協力しかありません。私たちは問題を詳しく調査し、必要なリソースについてもっとよく理解するために、より密接なチャンネルを築く必要があります。他に関与してもらうことを考えるべき関係者は、学術団体です。私たちのデータライブラリアンが自分

に足りないと感じることがあるスキルセットは、データやその特性についての学問領域特有の知識です。学術団体は、学問領域特有の専門知識をもたらす上で、新たな種類の役割を果たせるでしょう。従って、私たちはその領域における従来からの重要な貢献者である関係者と共に、従来のものとは若干異なる新しい種類の協力を模索しなければなりません。

●**村山**　その意味で、深貝先生に大学図書館長の立場からの意見を伺いたいです。データライブラリアンの仕事は日本に今ないのですが、大学の学部ファカルティでつくったデータのメタデータなど、ある程度ディシプリンから離れた学術情報管理として、データに関わるようなワークフローなどを日本の大学図書館でつくることはハードルがかなり高いでしょうか。実験的なことやパイロットプロジェクトをするという道はないものなのでしょうか。

●**深貝**　まず、私はもはや図書館長ではありません（笑）。

●**林**　だから言えることがたくさんあると思います。

●**深貝**　後でパネルのときに少しお話しさせていただきますが、今の話の限りで言うと、大学図書館でデータの管理に関わることまでお任せするというのは、今の大学図書館の方々が置かれたさまざまな用務とスタッフの配置からして難しいです。それは大学図書館がやるかやらないかではなくて、大学の管理運営の責任を持っているセクター、つまり管理職の方々が、自分の大学の機能をどこで発揮すべきかと考えたときに、学内の特色あるデータを世の学術コミュニティに積極的に出す必要があると判断するか、どう取り込むかという問題に恐らくなると思います。

　従って、研究に重点を置いている総合大学であれば可能かもしれませんが、研究に重点を必ずしも置かないような大学であれば、学部が専門性があってユニークな学部に絞られているような大学であれば考え得るけれども、そうではないところだと相当難しい話だと思います。

●**村山**　結局は、「論文アウトプットだけではなく、データも本学の重要な学術情報資産であるから図書館として取り組むべきだ」という、大学のエグゼクティブ、ヘッドクオーターの意思決定がないと恐らくは動かないと想像しているのですが、そういう流れをつくる・・・すみません、自分で言っていて、そういうこともハードルが高いですよねと結論が出てしまいます（笑）。

●**林**　ぜひまた Paul さんと Heather さんにお越しいただいて、大学の経営者向けに、科学とは何ぞやから入ってこの話をしていただきたいという流れになってきたと思います。それでは後半のパネルディスカッションにそろそろ移りたいと思います。どうもありがとうございました。